



Title	[25]ジャガイモ隊長
Author(s)	松山, 文生
Citation	満州ハイラル戦記, pp.211-221; 1994
Issue Date	1994-08-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/29543">http://hdl.handle.net/10069/29543</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-16T02:59:21Z

## ジャガイモ隊長

自給自足のため、C收容所はジャガ芋畠を收容所から三十キロメートルくらい離れている郊外に持っていた。その隊長がいないので、私が軍医兼ジャガ芋畠隊長として行かされた。I少尉が来て、員数外となったからであろう。

遠い道をトラックに揺られて、ジャガ芋畠に行った。当時、ジャガ芋畠にはY軍曹以下十五

名くらいの兵隊がいた。私が行つて、最初に皆からいわれたことは、炊事係を代えてくれということであつた。炊事係はWという伍長がしていたが、皆の意見なので、辞めて貰つた。W伍長は「皆の意見でしょう。皆は私を辞めさせたくて軍医殿に言いつけたのでしよう」などと、大分ぶつくさ言つていたが、皆が推薦する日一等兵と交代してくれた。作業は炎天下に畝に畝を作り、穴を掘り、種芋を穴に入れ土を被せ、雑草を除去し、ジャガ芋を大きく育てることであつた。

私は将校用の天幕張りの宿舎に一人で起居した。朝、七時頃、炊事係が「起床の時間です」と言つて私を起こしてくれる。作業員用の天幕張りの宿舎には三〇人収容出来て、私の宿舎から二〇メートル離れた北側にあつた。その北側は二〇〇メートル平方の広い草原で（この草原をS草原と名付ける）私は朝礼をした。その後、私は宿舎に帰り、朝食をとり、ハイラルから持ってきた医書を読んだり、皆が作業しているところに行つたり、宿舎の回りを散歩したりした。私はこの農場に来て、始めて腹が減るとはどういうことか分かつた。C市に来て、A、B、Cの収容所を渡り歩いたが、医務室の作業が余り体力を要する仕事ではなかつたためか、空腹を感じたことはなかつた。農場では空気がよいせいか、また歩き回るせいか腹がひどくすいた。私が炊事係に話せば、食事を沢山貰うことが出来るかもしれないが、それでは作業している兵隊に対して悪いし、部下にたいしていざという時、示しがつかない。我慢するより他にはな

いと思つて兵食を食べた。

私の宿舎の西に一〇メートルくらい隔てて農場監督者のソ連人の老夫婦が矢張り天幕張りの宿舎を建ててすんでいた。一度何かの時にその奥さんからパンを買つてひどく嬉しかったことをおぼえている。農場での生活は朝起きると、昼まで仕事をすれば、昼食が食べられ、昼食後は夕方まで働けば晩飯が食べられ、晩飯後は何もせずに朝まで眠れば、朝食が食べられるという全く本能的な利那主義の楽観論を持つていなければ生きて行けないような世界だった。

農場にいる時、ある兵長と話をしている、「君の入隊前の職業は何か」と尋ねたら、「学生です」という答えが帰つてきて驚いた。よく聞いてみると東京のある私立の高等商業学校を昭和十三年に卒業し、そのまま兵隊にとられ、北支を転職してきたと言つていた。転属後に進級命令が届き、そのために七年兵で兵長でしかなかったのである。兵隊は七年おれば普通は軍曹になるが、彼は運が悪かつたのである。

話は変わるが、C收容所で私の近くに六十歳に近いGという姓の砲兵の老中尉が起居していた。彼は全く兵隊からの叩き上げの将校で、少尉候補者出身でもない将校であつた。私はG中尉に何年間、兵営の中で暮したか聞いたことがある。「九年間、兵営の中で暮らしました」との返事に驚いた覚えがある。「よく九年間、兵営の中で暮らせましたね」とあきれた私の言葉に、G中尉は「夜が来ると、私達の天下ですわ」とこともなげに答えた。厳密に言えば、陸軍の軍

隊には夜は週番司令と週番士官しか将校はいないので、下士官が私達の天下と言う意味も分かる。また、そうでなければ、あの堅苦しい軍隊の中に住めるはずもないし、住む人もいるはずがない。「将校商売、下士官道楽」という言葉もまんざら嘘ではないわけだ。

話は農場に戻るが、S草原の北側と東側に広い農地があり、そこに私達はジャガ芋を作っていた。東側のジャガ芋畠の更に少し東側に三メートルくらいの道を隔てて蜜蜂小屋があった。宿舎から東に二〇〇メートルくらい馬車でゆき、直角に北に曲がって暫く行くと、井戸があり、そこから私達の日用の水は馬車に乗せた樽に入れて運んで来るのであった。時々馬車を引いている馬が蜜蜂に刺されて飛び上がっているのが農場から見えた。

農場の仕事は太陽に照らされ、アブに刺されながらするので大変であった。皆顔にイヒチオールのような樹液を塗り汗みどろになって働いた。何も考える暇もない単純な農夫、労働者の仕事をしていた。楽しみは秋の収穫時に腹一杯食べられるジャガ芋であった。

秋が近くなると茸が取れた。S草原から西の方に四〇〇メートルくらい行くと、背の低い松の生えた松林があつて、そこでは椎茸に似た茸が籠一杯に直ぐとれた。特においしかったのは、白樺の根元にはえている私達が白樺茸と呼んでいるものであった。ソ連人は余り茸は食べない。塩づけにしておいて食べるようである。茸中毒の怖さを知っているのかもしれない。C市は昔、葉草を栽培していたところとも聞いたことがある。

話は私がC收容所に着任した頃に遡るが、N少尉はかつて食べ物で中毒を起こしたと言う話を聞いた。暫くして私はN少尉と仲良くなったので、食中毒をどうして起こしたのか聞いた。彼はその時、作業に出ていて、たまたま兵隊が見付けた牛蒡ごぼうそっくりの植物を下士官と二人で焼いて食べて、昼飯を食べに收容所の所属中隊に帰って間もなく廊下が鱒で一杯になっているのに気づき、それを一匹一匹拾って食べている内に、自分でも何かおかしいという気になり、下士官に尋ねたら下士官も同じような感じを持っていると言ったので、これはただごとではな  
いと思ひ軍医のところに行ったら何かの中毒と言われたそうである。幻視が起きたのであろう。

S少尉というT大より学徒出陣で出征してきた優秀な人がいた。この人は在隊中の話が変わっているのです、書いておくことにした。彼は満州の某大都市の停車場司令部付きの主計少尉であった。主計であるから色々な仕事をしたのであろうが、その一つに貨物廠から停車場司令官の酒を貰ってくる仕事があったそうだ。貨物廠は彼が行けば、簡単に酒を渡してくれたという。日本から満州に酒を一升瓶で五〇〇〇本送るとする。そうすると途中で必ず何本か瓶が割れる。これは当たり前である。破損率というのがあって大体何割何分ときまっているらしい。然し、中には割れないものもあるので、その分を彼が行くと渡してくれるらしいのである。渡してくれない時は、どうするかというと、停車場司令官は貨物列車を規定の時間通りに発車

させてしまうのだそうだ。そうになると、貨物廠は規定の時間までには荷物の荷降ろし作業が終わっていないので、困ることになる。こういう、持ちつ持たれつの関係で両者の間は巧くいつているらしい。

海軍の兵曹長であつたという前述のD准尉も、船は出港すると、目的の港に着くまで、必ず途中で暴風雨に遭遇したように航海日誌に書いて置くのだと言つていた。そうすると、目的の港に着いて荷物に異常があつても、暴風雨に遭つたという記録が残つていれば、保険金が貰えるとのことであつた。世の中うまく出来ている。

ジャガ芋中隊に話を戻す。ジャガ芋が収穫できるようになるまで、他の仕事を時々させられた。私は黙つて見ているだけであつたが、結構面白い。農場から少し離れた場所に幅五メートル、長さ一〇メートル、深さ一メートルくらいの穴を掘るように監督から言われた。穴を掘り始めた時、誰かが掘つた穴の土を運ぶのに階段を付けた方がよいのではないかと言つた。幅一メートル、高さ二〇センチメートル、足の踏み場二五センチメートルの階段を作りながら穴を掘つていった。何日か経つて穴を掘り終わった時、立派な土の階段が残つたが、その階段を取り除く作業がまた一仕事であつた。「誰だ、階段を作れと言つたのは」とお互いに文句を言い合つて階段を造つている土の除去作業をした。私は何も言わなくてよかつたと思つた。皆はうまく作業が進む時は連携して仕事をしてゆくが、いったん行き詰まると責任のなすり合いをすると

ということが分かった。私は以後、仕事をする時には、余り口を挟まないようにした。

私より大学で一年先輩であった人が矢張り軍医となり、ソ連に抑留されて日本に帰って来たが、何かの時に、会って話をしたら、「日本人くらい悪い奴はいないぜ」と憤懣やるかたない口調で私の同意を求めたが、彼は吊るしあげか何かをくって腹が立ってたまらなかつたのである。

ジャガ芋農場にいる時、二回ソ連人の家に往診に行った。一回は農場の東二キロメートルくらいの所にある農家であつた。十二、十三歳くらいの女の子を診察した。肺結核のようであつた。診察して帰ろうとすると、その子の祖父にあたるような男が私の上着の右の物入れ(ポケット)にマホルカ(煙草の一種)を一杯くれた。彼等の精一杯のお礼であつたのであろう。というのは、彼等の家には驚くほど品物が無い。極端に言えば、寝台と戸棚があるくらいである。貧しいなあと思つた。このソ連の理想郷をみいだして、家族諸共移住したいと言う兵隊がいたから日本人にも奇特な人がいるものである。これにはソ連の收容所の所長始め幹部連中も意外な感に打たれるらしく、前例がないということで私がソ連を離れるまでは、まだ結論が出ていなかった。

二回目の往診は收容所の将校の家族であつた。ソ連の兵隊が馭者になつて馬車に乗つて十二



キロメートルくらい離れた部落に行った。お婆さんの目を診てくれということであった。私が眼瞼をひっくり返しきらないでいると、お婆さんは自分で瞼にマッチの軸をあてて翻転させてくれた。医科大学の時に眼科の教授が西洋人はマッチの軸を使って瞼を翻転させなければ、目が窪んでいるので上眼瞼結膜がうまく見えないという講義をしたことを私は思い出した。将校の家だけあって少しは家具があつたが、私には矢張り貧しく見えた。二〇平方メートルくらいの自家農園を持つていた。そこには所狭しとトマトなどが畝に作られていた。私は夕食をご馳走になった。粗末な食事であつたがソ連人の暖かい心に触れた気がした。

マッチで思い出したが、私達は普通火を起すのには、火打ち石を使つていた。一寸考えられないであろうが本当の話である。私は道具さえ揃えてくれれば、今でも火打ち石で火をつけることが出来る。この芸当はソ連にいた者でないと出来ないはずであり、私のささやかな誇りでもある。

ソ連人が日本人と違うなあと感じたことは、ジャガ芋中隊に私がいた時にもあつた。収容所の将校が家族連れで私達の農場にジャガ芋を作りにきたが、自分達の乗つてきたトラックで寝泊まりして、絶対に私の将校天幕を使わせてくれというようなことは言わなかつた。日本なら敵の捕虜が天幕の将校宿舍で寝て、日本人がトラックの下で寝るなんてことは、先ず考えられない。私の上司にあたるソ連の女医もジャガ芋を耕しに来たので、私が手伝おうとすると、「い

いです」と言つて断るのだ。人を自分の都合で勝手に使つてはいけないという法律でもあるのかと思われるくらい遠慮する。私はこれはソ連の良い所だと思つた。

ジャガ芋中隊にいる時は、私は歩き疲れたためか、よく眠つた。時々夢を見た。日本の夢ばかりであつた。九州の門司から長崎に行く列車に乗つて揺られている夢が多かつた。途中で目が覚めて天幕の破れ目から夜空の星を見て、「ああ、私はソ連の捕虜になり、今ジャガ芋中隊にいるのか」と思い、愕然とするのであつた。「戦犯（戦争犯罪人）でも良い、日本に住んでいた」私はその度に思つた。夕方は南に見える星の蠍座（さそり座）を見つめ、日本で見えていた蠍座よりも尻が地平に近づいているのを見て、私は遥けくも遠くにきつるものかなとの感を深くした。

ジャガ芋の収穫時には収容所から沢山の兵隊がきて、手伝つてくれた。取立てのジャガ芋を、その場でそのまま焼いて食べる時のジャガ芋の美味しさは格別であつた。ジャガ芋の収穫が終わると応援の兵隊達は収容所に帰り、また、本来のジャガ芋中隊の兵数に戻つた。その頃、収容所本部のC軍医大尉から日本に送還するのに病弱兵を報せるように言つてきたので、北支にいた七年兵の兵長を真つ先に名簿にいれた。彼が農場を出発する時、よほど「君は日本に帰れるんだぞ」と教えてやりたかつたが、軍規をみだすので私は黙つて見送つた。

ほんの二ヶ月くらい前であつたか、私の家内が思いがけないことを言つた。家内の父のとき

ろに昭和二十二年九月頃、私が元気でソ連に抑留されていることを東京から知らせてくれた人がいたというのである。家内の父は家内にその葉書を見せなかつたので、何という姓名の人であるか分からないと言っていた。私にも心当たりはない。強いて言えば、この兵長である。然し、私は彼に私の家内の実家の住所を話した覚えはない。考えられることは、かの兵長君は私のことをひどく恩を施してくれた人と思い、私が長崎医科大学を卒業したことを知って、あらゆるつてを求めて、私の家内の実家の住所を探し出し葉書をだしたのではないかと思う。古語に「情けは人の為にならず」とあるが、やはり「情けは人のためになる」のである。

捕虜の通信が、葉書で許可された時も私は私自身が日本に着くまでは、未練がましいと思つて葉書は書かなかつた。私の家内の実家の住所を知っているものはソ連の抑留者の中にはいはずである。よほど苦勞して探さないと、知り得ない。それだけの努力をしてくれるのは兵長氏しかない。出来たら一度会いたいものだが、元氣でおられるのだろうか。最近、氣になることの一つである。

ジャガ芋畠の東側五〇メートル×三〇メートルの畠に、ジャガ芋の花が咲く前頃から人參を私達は栽培させられた。道一つ隔てて蜜蜂小屋がある。雨が降り始めた時や、夕方頃うっかりしていると大変である。数万匹の蜜蜂が、私達の頭の上を飛んで、蜜蜂小屋に帰ってくるからである。立ったままでいると蜜蜂に刺される。私達は地面に伏せて蜜蜂が通り過ぎるのを待つ

のであった。面倒なところに人参畠を作ったものである。

九月の終わり頃には雪が降った。それから寒い日が続いた。仕事も寒さのために捗らなかつた。皆、起床と共に白い息を吐きながら整列し、のろのろと作業をした。

十月に入ってから、専ら人参にかかりきりで除草などをしていた。そして収穫時期になつたのでぼつぼつ人参を抜いて収穫し始めていた。ジャガ芋畠にはソ連人の女が入って取りのこしたジャガ芋を探して拾っていた。